

磐梯山崩壊まで2時間ほどを費やして段階的に進行した」という説については、積極的な支持を全面的に得るには至っていないように思われる。著者は、本書で、多段階崩壊説を、多数の証言および文書・図・写真記録、それらの観察・撮影等が行われた位置や時刻の吟味、現象推移の地形学的妥当性、従来の説の根拠の再検討等から多面的に論じ、それをさらに強く押し出そうとしている。そのためには、著者自身が（あるいは著者が関与して）すでに作成・公表している各種復元図や模式図、当該地の現在の地形図等を、もっと掲載してもよかったのではなかろうか。一方、原資料とも言うべき写真や絵画はよく掲載されている。

近代日本が経験した唯一の「山体崩壊」イベントの全容を正しく知り、またその知識に基づいて、うろたえずに正しく恐れる火山防災対策を考える手がかりを与えるものとして、本書は広範な読者に勧められる。本学会2006年秋季大会シンポジウムのテーマでもある「防災地理教育」への活用も、大いに可能であろう。研究者・学習者にとっては、現象の実態解明に関わる直接的・間接的諸事実と同時に、それを正しく用いる方法すなわち歴史災害研究方法論が、実例をもって示された書としても有用である。しかし、世界中の専門家に向けては、本書の第2章・第3章を中心に第4章・第5章の一部もまじえたタイトな議論を、欧文で（部分的には Science Reports of Tohoku Univ. Ser. 7 (Geography) に公表されているが、改めて）刊行することが必要ではないか。そうしないと、つい先ごろまでの日本国内の状況と同じように、今後とも Sekiya and Kikuchi (1889) あるいはその亜流的解釈が罷り通ってしまう心配があるから。

(田村俊和)

平岡昭利編著：離島研究Ⅰ 海青社、2003年、218ページ、2,800円＋税、ISBN-86099-2016C0025。離島研究Ⅱ 海青社、2005年、222ページ、2,800円＋税、ISBN4-86099-212-1C0025。

離島は古くから地理学の恰好の研究対象であり、これまで多くの島嶼地域の分析から多様な地域性の一端が明らかにされてきた。本書は主として近年の実態調査にもとづく内容でまとめられ、現代のわが国社会の方向性に示唆を与える島嶼論が満載された点に意義を言いたすことができる書である。

既刊の「離島研究」は、その続編（「離島研究Ⅱ」）が

出版されるにあたり、増刷と合わせて「離島研究Ⅰ」の名称に改称された。したがってここでは「離島研究Ⅰ」と「離島研究Ⅱ」を合わせて紹介したい。「離島研究Ⅰ」は3部から構成され、I. 島の特性と結びつき（1～5章）、II. 農業・牧畜の島々（6～8章）、III. 漁業・養殖の島々（9～12章）から成る。1章で須山聡が、全国319の有人島嶼の中から人口50人未満の島嶼、架橋された島嶼、軍事・気象関係者のみが居住する特殊な条件の島嶼やデータの欠損した島嶼を除く259の島嶼を対象に、計量的手法によって7つの島嶼群に類型化した地域区分を提示している。2章で石川雄一が長崎県対馬、壱岐、宇久小値賀、上五島、下五島の23町村を対象に、クラスター分析とアンケートにより、離島住民の日常生活圏の変化と北部九州の都市との結びつきを、メンタルな空間認識の視点を入れて分析した。3章では須山が奄美大島を対象にして、都市とシマ（村）の結びつきを人的ネットワークである郷友会をキーワードに分析し、組織の機能やその空間的性格を明らかにした。4章では川原典史が香川県伊吹島を対象にして漁民の広範な移動と展開をライフヒストリーの手法により検証した。5章では宮内久光が沖縄県座間味島を対象にして、沖縄の美しい海にあこがれた都会人の移住を契機にダイビングの盛んな島に変貌する過程を分析した。6章では賀納章雄が沖縄県渡名喜島、粟国島を対象にキビ栽培の復活と定着過程を明らかにし、その復活には伝統と共に現代性という要因が存在することを指摘した。7章では助重雄久が沖縄県伊江島を対象に、サトウキビからの転換を図った離島農業の展開過程と課題について述べた。8章では大呂興平が島根県隠岐・知夫里島を対象に、肉用牛繁殖経営についてその経営が島の伝統を活かした農民の生計戦略によって低コスト構造になっていることを明らかにした。9章では田和正和が愛媛県越智諸島を対象に、漁場という海の空間利用をこれまでほとんど行われていなかった漁業者の視点から生態的に分析し言及した。10章では山内昌和が福岡県小呂島を対象に、漁業の技術革新や経営組織の柔軟さなどによって小離島でも人口が維持されてきたことを指摘した。11章では中村周作が宮崎県島浦島を対象にして時間地理学的手法でまき網漁業を分析し、その漁獲物を飼料とする有利性から開始された養殖業について説明した。12章では平岡昭利が兵庫県家島を対象に、3つの集落の地域性を明治前期の漁業構造、特に階層構造を比較しながら考察し、集落間の異

質性を強めていることを指摘した。

さて須山の分析によれば、わが国の島嶼は7つに類型化され、主として高齢者が漁業に従事する生業的漁業島嶼群、生産年齢人口が多く漁業としての産業集積のみられる自立的漁業島嶼群、中心地機能と製造業の存在する小規模中心地・製造業立地島嶼群が全体の72%を占める。それに対して観光を主産業とする島嶼群はわずか5%と少ない。そのため本書の内容も漁業や農業といった島の生業に関する章が8章にも及び、島嶼の性格を明らかにするのにふさわしい構成といえよう。

次に「離島研究II」は前作同様3部から構成され、I. 島嶼の特性と移動と結びつき(1~4章)、II. 島嶼の産業構造とその展開(5~8章)、III. 島嶼の集落と生活行動(9~12章)から成る。1章では宮内久光が全国の離島を対象にして、重回帰分析の手法を用い、最寄りの中心都市での滞在可能時間を分析し、滞在可能時間延長の方策を提案した。2章では須山聡・鄭美愛が奄美大島を対象に、住民のこれまでの移動歴全てを分析し、5つの移動パターンを分析した。3章では宮内久光・下里潤が沖縄県浜比嘉島を対象に架橋が島にどのような影響を与えたかについて分析し、架橋効果やその集落間の差異について明らかにした。4章では浮田典良が沖縄県八重山諸島を対象に、かつて行われていた遠距離通耕について発生原因を整理すると共に、通耕の事例を詳細なモノグラフに表した。5章では平岡昭利が孤立性の強い島嶼の事例として沖縄県大東諸島を取り上げ、主にプランテーション経営などの歴史的展開について考察した。6章では河原典史が香川県粟島を対象に近世の海運業の島から、明治期以降は船員の島へ、さらに養殖業の島へと海をベースに展開した事例についてその過程を丹念に言及した。7章では山内昌和が長崎県長島を対象に小離島でありながら人口が減少しない島の事例として、その要因を周辺の島々と比較しつつ、漁業の持続性を協調的な行動というキーワードで分析した。8章では宮澤仁が長崎県福江島を対象に離島の小売業と消費者行動を計量的手法で分析し、最近10年間で購買行動や商圈構造が大きく変化したことなどを検証した。9章では大城直樹が沖縄県小浜島を対象に、自然・社会・文化のそれぞれの事象を分析しつつ、生活様式が均等的水平性を保つことを指摘した。10章では福田珠己が沖縄県竹富島を対象に、赤瓦の伝統的建造物群について、創られた伝統という視点から

捉え、地域文化の誕生のプロセスを検討した。11章では賀納章雄が沖縄県伊良部島を対象に、伝統的作物であるアワ栽培の存続が、地域の収穫儀礼と密接に関わっていることを論究した。12章では山田浩久が急激な人口流出に見舞われる離島の例として山形県飛島を取り上げ、島民の「別宅」にスポットを当てながら、その生活行動の変容を明らかにした。

離島と言えば一般に過疎地域として思い浮かぶが、本書で人口数を維持する離島と急激な人口減少に見舞われる離島とが分析・紹介されていることは実に興味深い。前者は長崎県長島、後者は山形県飛島である。むしろ自然環境や社会環境の相違に加え、本土や周辺の島々への距離等が異なるため、一概に比較できないのは承知しつつも、1950年代半ばとほぼ同じ人口数を維持する長島に対し、島の人口が1950年の約2割にまで減少した飛島とではあまりにも落差が大きい。離島での急激な人口減少が進む中で、長島の例は特例なのかもしれないが、山内が主張するように島民の協調的な行動を上手く活用することによって、定住のための経済的な条件を構築していくことが離島振興の一助となるよう願わずにはいられない。またそのような元気な島が一つでも多く出現することこそ編者・平岡の究極の願いなのではなかろうかと読後に想像を巡らせた。

両書に共通するのは各章の大半が既刊の学会誌や大学の紀要論文等に加筆・修正したものであり、その際新たな図、表、写真が加えられ、読者の理解の一助として大いに効果を発揮している。また各章は一部を除き、周到な現地での実態調査にもとづく内容であり、産業維持の方策、島民の生活行動・様式の変化などが手に取るように伝わってくる。

最後にわが国の島嶼数は西南日本に多く分布していること、したがって研究者の関心がおのずと西南日本の島嶼群に傾くことは当然のことである。しかし2冊を通して東北日本の島嶼群で取り上げられたのは山形県の飛島だけと極端に少ないのは、タイトルから考えても残念であると同時に、思わず次への期待も抱かざるをえない。願わくばシリーズ3作目には、東北日本の多くの島嶼群を取り上げて、その地域性の解明を大いに期待するのは、評者はもとより多くの読者の共通した願いであろう。

(岩動志乃夫)